

特36

905



明治二十五年九月發兌

蓮如上人御代記圖繪

京都書肆

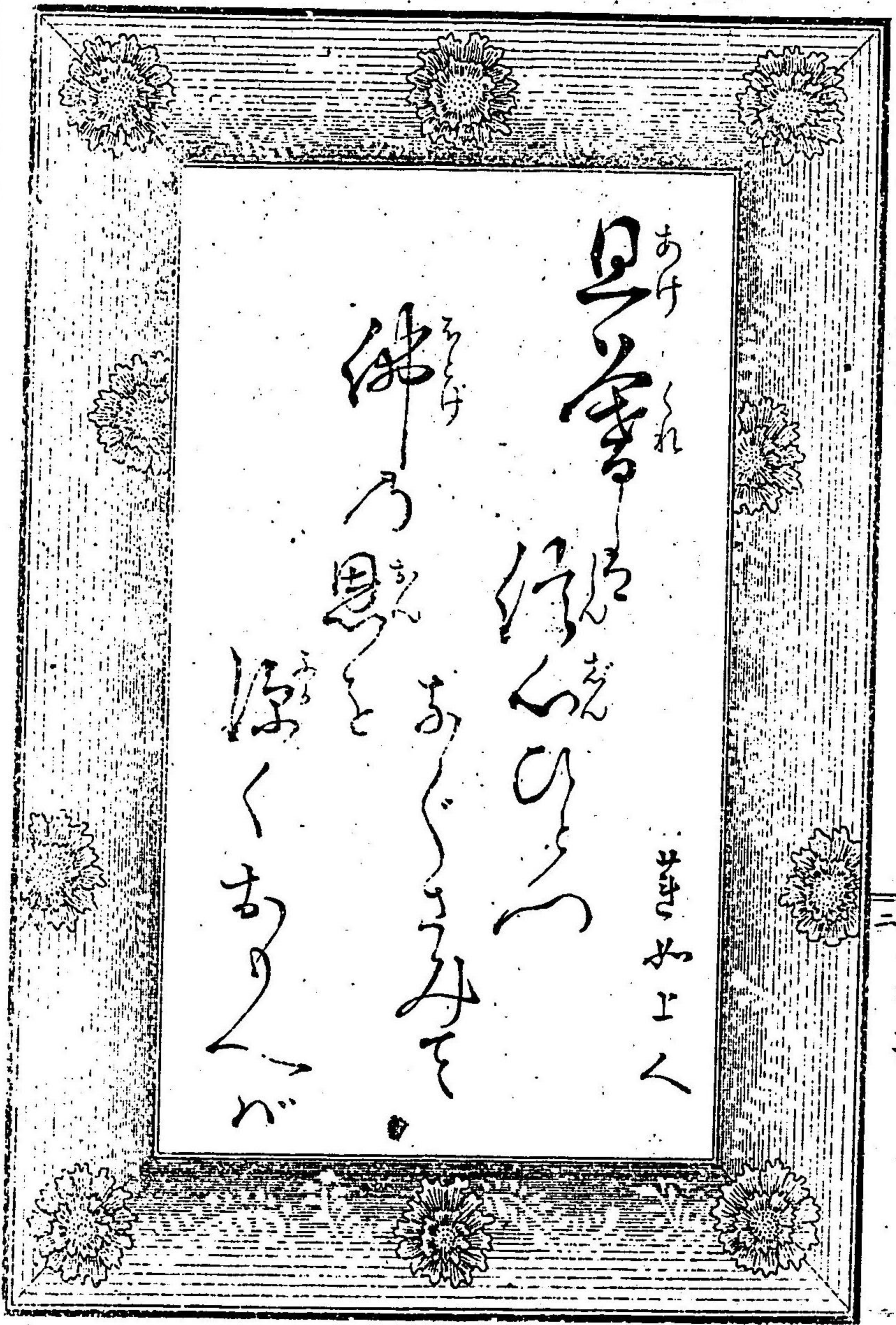
開益堂藏

蓮如上人御一代記圖繪目錄

卷之上

- ① 蓮如上人御出誕並石山寺觀世音奇瑞の事
- ② 大谷本願寺御繁昌並山門大衆蜂起の事
- ③ 三井寺南別所近松へ御移住並御真影御遷座の事
- ④ 越前吉崎御堂御建立並朝倉年景宝財寄進の事
- ⑤ 諸宗より偏執並息女見玉臣御往生の事
- ⑥ 蓮如上人多屋衆へ御制誠並馬書朝倉家へ贈る事
- ⑦ 加列富樫政親一揆を鎮らる、並川崎專祿寺兵火の事
- ⑧ 蓮如上人十一ヶ條並專祿寺再び建立の事

卷之中



蓮如上人

日守
行心の

伴
思
あ
く
み
た

深
く
あ
り
が
い

- ⑨ 哀傷御消息並慶順兼念の弟子卒去の事
- ⑩ 朝倉年景子息氏景吉崎へ参詣並三條の制狀披露の事
- ⑪ 蓮如上人敏景に對し法話並富樫政親蓮師を尊崇の事
- ⑫ 上人北海を眺て和歌詠吟並吉崎火災の事
- ⑬ 蓮如上人吉崎の御文章並吉崎退去の事
- ⑭ 河列出口御堂草創並龍女上人に謁する事
- ⑮ 堺御堂御建立並契丹國の人教化を受る事
- ⑯ 山科御堂御建立並近松小御越年和歌の事
- ⑰ 御影堂御造建並吉野山材木登る事

卷之下

- ① 御真影御遷座並三井寺より御真影を遷る事

- ② 山科にて七昼夜御法衣初て行る並三種の神器御誓の事
- ③ 山科阿弥陀堂御建立並寶祚延長を祈り奉る事
- ④ てに義あを以て易行道を教ふる選子内親王和歌の事
- ⑤ 大阪御堂御草創並聖德太子示現の事
- ⑥ 聖德王未來記並本願縁起の文の事
- ⑦ 蓮如上人御不例並下間安藝勘氣赦免の事
- ⑧ 上人御病中あが山科へ移りゆ並吉野櫻を献じけ御和歌の事
- ⑨ 御辞世御詠歌並御病床に御物語の事
- ⑩ 御父御聽聞並御秘藏名馬を御覽せしる事
- ⑪ 蓮如上人御遷化並御臨終不遇する人々の事
- ⑫ 六字の名號奇瑞並祖師の尊像現しる事

蓮如上人御系譜

○親鸞聖人 有範息小名十八公麻呂後剃髮号範安少納言公善信房又号愚禿 弘長二年壬戌十月廿八日入滅 御年九十歲

印信 寺内大貳道世

女号小黑女房

善鸞 慈信房宮内卿 母月輪關白

○如信上人 文曆元年誕大納言 正安二年正月四日逝 六十二歲

明信 号栗津信蓮房

道性 從五位下大夫出家 号益方大夫入道

女号高野禪臣

覺信尼 初日野左門佐廣經室号弥女 文永九年本願寺草創

覺惠 父空門佐廣經山門阿闍梨 中納言道世

○覺如上人 真法印權大僧都 中納言宗昭 一乘院信昭 大僧正門侶 号名光仙 觀應三年正月十九日逝 八十二歲

存覺 法權大僧都 常樂堂祖 應安三年癸丑 二月廿八日逝 八十四歲

青蓮院二日尊助親王 門侶

從覺 法權大僧都 大納言 青蓮院慈道 法親王門侶

○善如上人 法印權大僧都 大納言 權大僧都俊光御為子 康應元年二月廿九日逝 五十七歲

○綽如上人 法權大僧都 權大納言時光御為子 觀應四年四月廿四日逝 四十四歲

○巧如上人 法權大僧都 大納言 皆康卿為子 号證定 觀永年十月廿逝 六十五歲

○苾如上人 法權大僧都 廣福大納言 治卿為子 長祿元年六月 十六日逝 六十二歲

○蓮如上人 法權大僧都 中納言 兼壽權中納言宣光御為子 明應三年三月廿五日遷化 八十五歲

順如 法權大僧都 号光助 中納言 号領成院 唯稱院右大臣時光公為子 母下慈空平貞收女

女 光真堂法名如慶 常樂堂 兼忠母

蓮泉 左衛門督号二位瑞泉寺 又号木泉寺

女 出家法名見玉 持安庵

蓮綱 法權大僧都 号松岳寺 始花園院玄尊弟子

女 出家法名壽尊 見玉弟子

蓮誓 法權大僧都 号三位 母同上 号光教房 又光園房

○實如上人 大納言 法權大僧都 号教恩院 母藤中納言永經女 大永五年二月二日逝 六十八歲

女 号左京大夫慈照院殿 法名妙宗 唯稱院右大臣為子

女 法名如空 興行寺室

女 法名祐心 伯中將資成室

蓮淳 三位 法權大僧都 号顯性寺 法名光應寺

女 法名了古

女 瑞泉寺 蓮欽室 貫心母 法名了如

蓮悟 法中權大僧都号本泉寺
又号慶光坊

女 願行寺勝惠室法名妙勝

女 超勝寺蓮超室法名蓮宗

蓮執 教行寺号二位又号兼琇

女 勝林房勝惠室法名妙祐

實賢 慈敬寺權律師宰相号兼照

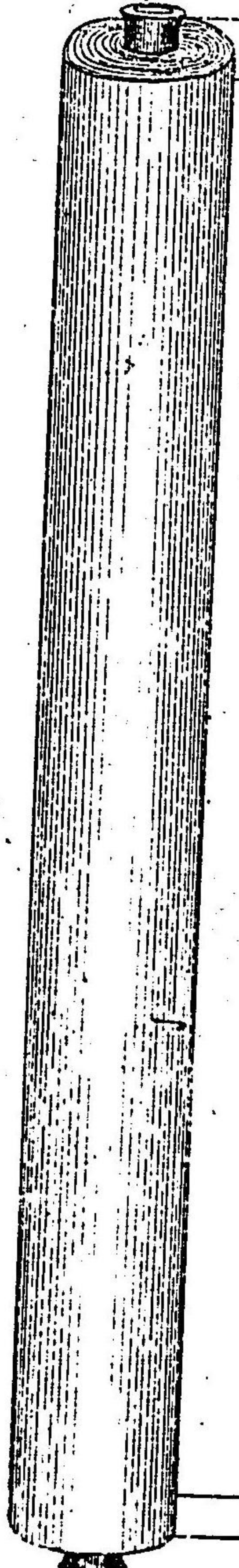
實悟 中將源後實經法中為子

實順 西證寺兼性右門督

實孝 本善寺侍從法中權大僧都
号兼愷

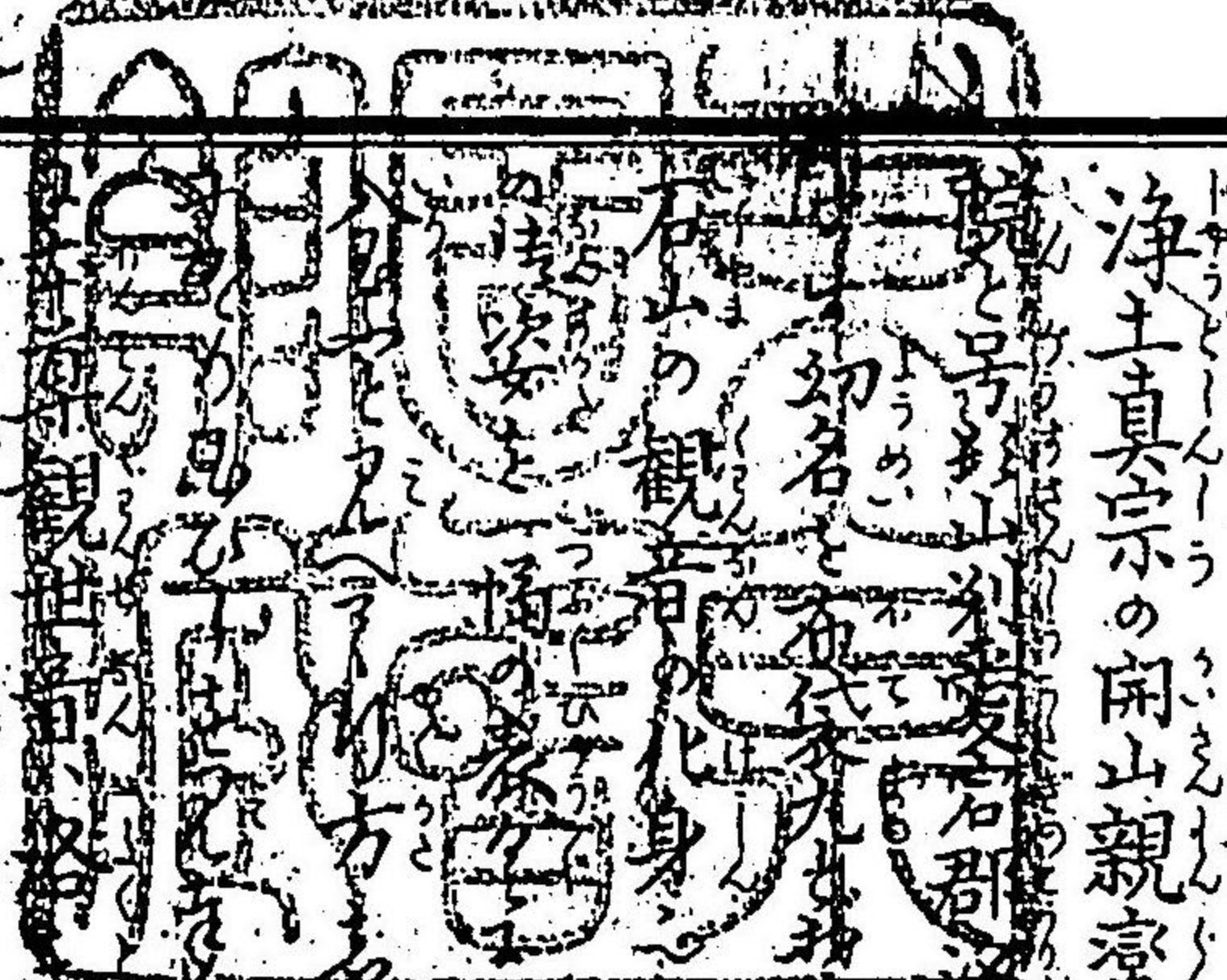
女 常樂臺光惠室

實從 順興寺法中權大僧都号兼智幼名九九九云
蓮師八十一歳の時誕生故二名とす



蓮如上人御一代記圖繪卷上

一 蓮師御誕生並石山寺觀音奇瑞の事



浄土真宗の開山親鸞聖人より第八代法中權大僧都中納言兼壽上人蓮如信證
院と号す石山寺觀音の化身也
石山の觀音の化身也
名付る御父は法印權大僧都中納言存如上人母公は江初
孫すへ一布衣衣九六歳の侍と記母公自ら壽像布衣衣九
畫せしきとれはこゝにありべき身なりとて御坐の内陣
に成もふ人と驚き石山寺へ移り一彼の壽像内陣
ありて其の思を侍寺傳ふ此を尋けるに一統正吐夜の妻
大谷よりあるに傳ふもやとてふことと答ふてれをす人つり
疑ひもあし觀世音の化現こと尊崇ありけり永享三年亥のま布衣衣九十七果一
して山門の長吏青蓮院御門跡の殿令にて判發得たり一則廣橋中納言宣光
卿の猶子として侍名を兼壽上人蓮如と改めり其此ハ萬事不便にて阿弥陀堂

八三間四面御影堂五間四面にて遠國邊都より
 の諸人も少々まじり御賜も金具付りて白小袖の
 裏にハ紙にて潮袖口をくろく絹をつけさせし
 きりとぞ時々南都の大衆院御門跡と師
 弟の契りまじり御未だ習ひて法相宗の
 奥義を授けりける時ハ天台山に参りて止
 觀の深理を究めそれより諸法まこと
 りて凡て三十餘年の堂聖を積りて空室
 徳元年蓮師三十五歳の時祖師聖人の御
 舊跡を巡拝せまやとて初て北陸に下向し
 るひ越前加賀越中の間所々に淨土ま
 く貴賤道俗を化導し玉ひけまは次第よ
 御門葉も繁茂し御歡悦ありて夫より越後よ



うつり信濃の善光寺に詣りむひ関東の國
 こゝかゝり巡後一むひ再び美洛にありむひ
 たり然るに父存如上人長祿元年六月十八
 日享年六十二歳ふして入寂しむ則ちは相承の
 依蓮如上人よりと魚も沙能母如田の計ひにて
 蓮如上人の御舎弟四光院應玄とて青蓮院尊應權傳
 都准后の御門信よりしを御家督の体にて姑りりて御中陰も満し久し前住
 上人の御遺状を完きするむ御相承蓮師にお遠慮しと直承よまさせりまこれ
 よろしは披露りりて御家督相承とそ定めむひなる此時蓮如上人四年四十三歳
 とおき聞へしよりに近江國今ヶ原の道曲として信心堅固の禪つりり方不大谷に系
 結し御勸化を聴聞し又金ヶ原へも御参駕を預ひ他より常随眠進し其邊の
 同行をも卒て御門葉も次第に多くなり夫より御化道寺一朝に溢き功德四海
 に満て法流益般衆ありまは禁庭より日華門を領りりて大谷に移しむひ



りり因て比叡山の衆徒とを如憤りて上人の弘法を障導一山谷の御堂を破却せんとせし囉哩らま

二 大谷本願寺御繫蒙並山門の大衆蜂起の事

大谷本願寺累代恙なく相續つりしが蓮如上人の御代に至りて御法流まんくは繫昌より珠に禁庭の御尊致も厚く諸國の末流浦々の門徒までも渴作日々に盛んありりしが諸山是を妬憎で窺も怨敵の如し其中に別して山門の大衆蜂起して寛正六年正月八日叡山西塔の慶徳一山を觸廻し其の事一を好衆侶貪欲の惡僧三塔より地聚り同九日の夜勢揚して不意を討へきとて十日の曉天大勢大谷へも押寄り本願寺に思ひも穿ぬるふれも衆僧大は印章し上人の葛布の十徳を召せ僧侶に什宝御筆物を抱て上人の法供一定法寺まで逃させしむりし佐木木如光といふ武士有り元二の信者ありしが其日も衆諸



せしやまか及不慮の逆乱出来しかば如光門外へ走り出て行者あれば狼藉を傷へと刀を

うり立勇威を显しけむに寡手の中より一人進み出て中けるいふくも王城鬼門のお護山

門の衆徒に汝等其法を汲ずして私に修念仏の新法を企て諸人を惑亂せしむる

条偏に我山の外道に早く降参して天台宗とまよひ蓮如房をもち汝等まで命を助くる

し左もあぐに今焼討せんとぞ言ひたる如光は荒言をすて安うに思ひりきお物あぐり

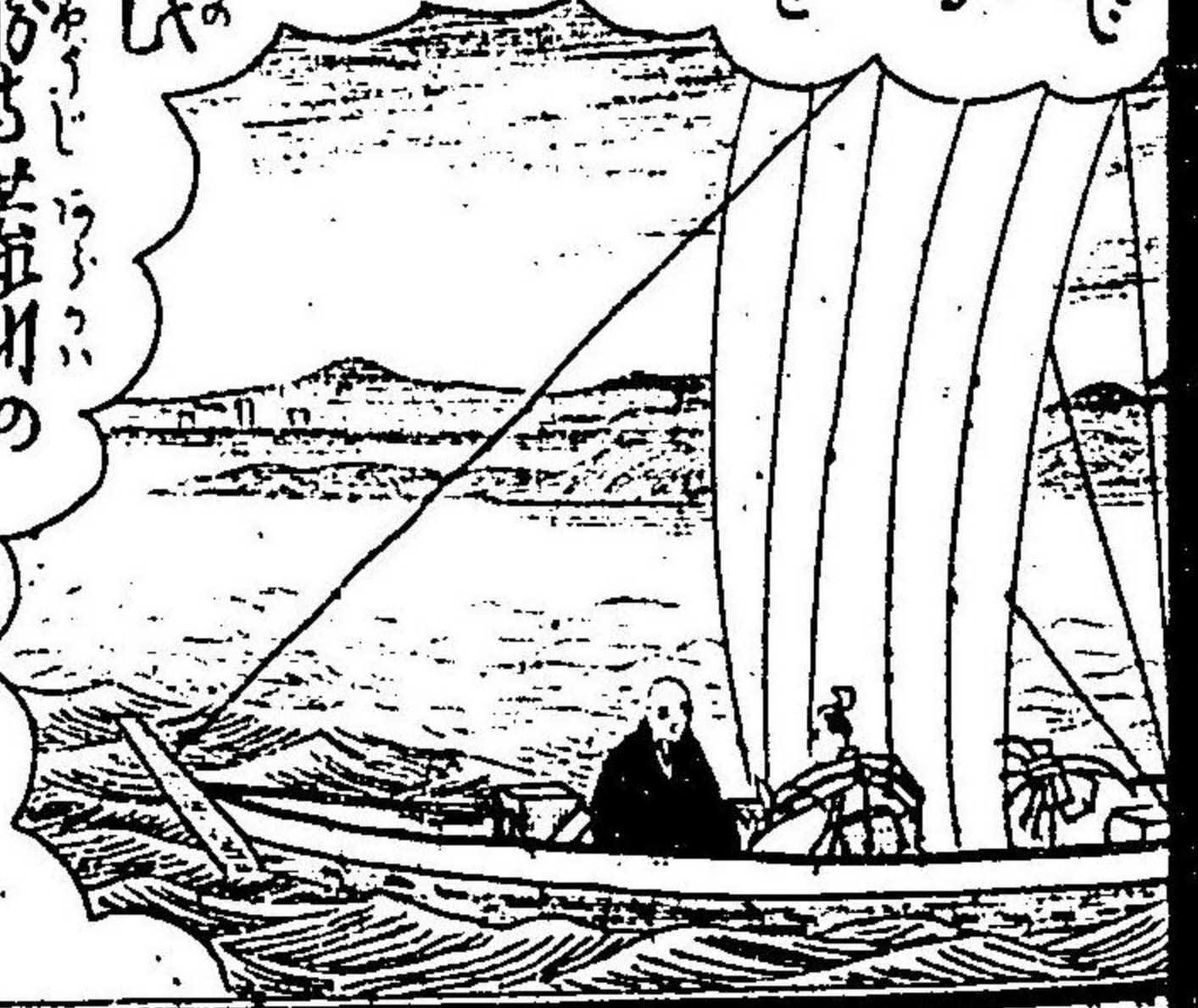
して多勢の中を四方八面に切て向う火籠をちびして戦ひける下間安藝法眼もかきこまへ馳向り敵教多討りて御真影を負すめしせ上人の法流を慕ふ



其頃天下發擾やして堅田の邊もらうばいかりなれば文明元年の暮江が大江濱名太郎左衛門とよすの堅田へ帰すは二月二日の夜まゝ松よて大津へ着岩あさしり濱名中上るハ三井寺と叡山といむりや不和まきハ三井寺を頼りつて然るべしと中上る蓮如もひてせう方ハ計ひたりと作なきハ太郎左衛門三井寺へ参り得と存候は頃て下間法眼を以て事の始末を具る作なきハ三井寺に三井の長吏田満院御門跡は許容りつて三谷へお尋三井の南別所近松古茂も領とせよ糸くせらまける上人斜ふれば悦喜あされ御真影を院内へ御遷りけりまじ息蓮淳房三位法下權大僧を附置文明三年辛卯五月中旬上人三井寺の大家に江對面りつて室に北園の内加賀越前の兩國ハ門徒も多し又ハ追部のりおまきハ山門の憤りもつりへらけりまきふつてかの地へ下向政なきやう作なきハ大衆領掌ハ江左も存然ハ親香聖人の尊像は性まかりも後致すべしとほ心易れといふこのり返答られハ上人大歡ひもひは真影も向ひ此度北園へ下向



のりハ法流を天下に弘通せり天さがる鄙の江入道まで化益致さんか考へ壽存へりく再び骨を拘くすめべし先ハ今生の心映をよとて双眼ハ法眼を以て供あふん逆不寺門近松をまび出の安藝法眼を以て供あて大津の浦より江わらまき海はの廣へ看るハ木芽峠の険しき山を越へ今庄湯尾峠存中懸ハ浅水の窟あどろろの五月下旬ハ越秀足羽羽庄小呂もよけ所ありて姑且俗男女を以て化奪りけり藤島山の超勝も荒川の奥りも和田の真宗も始りて日く夜く糸詣の僧俗稻麻の如く前代末の如くも之爰ハ川尻の性光坊とて博徳の傍りなり原仏心宗禪宗のあて高慢偏執の族あまき蓮如の教法を受先智の者忽ち真心懺悔して易りの門へ入るとまてつりも法を説て群集せしむらん我も一良師を以て是れを弘さん若邪義難はあらんかの上人を退教さんと密るハ刀劔とすなはて一日北の座へ坐す蓮如の御勅化を



徳安にて元夫直入の要路に弥陀の本刹を過さるとり出離生死の肝文を一聴
 千悟して立ぬは奈む懺悔一年未修学せる仏心字を改め新上人の弟
 子とて一向専修の法席を尊後せざる事獲石のめり夫より性光悟の常隨
 てる時上人を偏ひする三仏の湊合供りけるかのは亦控てもは教化の遠
 の民俗大に敬伏しする本尊の風を路のまぶし

④吉崎御堂御建立並朝倉教景宝財寄進の事

蓮如上人思惟しるは加越の西國の衆生の機縁熟味せりか天晴此地一字を造
 建して法水を潤さんと思ひもさ事越るに控て所々巡修しるは坂や那細呂本の
 御内吉水とよ所々風景待れていとありしる名地ありまが山嶺をぬり煙霧
 を眺るるは三方を澎水漫々とて波浪を絶し一方の岡山階々として
 幾千里の隈あり北海をといらありて自ら浄土の涌清法
 邦を表し西りが詠せし益越の物の風ふくむるの風を清し
 既浦り新を今ふよみし越の白山忘まはたがけの香を



世を觀しりる、康を山の夕鳥の元常を告ぎハ忽ち
 厭離穢土の想を發し渚の波湧るを
 洗ふ音ハ苦空无我の響をとりやまれ
 四面の海里足下は是を踏ハ自然ハ
 天上の心地せざるを誠ハ三徑の清風
 陶令が宅九江の明月瘦公が橋と謂
 廬山ハおろおろハ方りざるの勝地ハ此地ハ
 御堂を建立りて北國の群衆を化益しあんと
 て此の地の頭をヨリわらハ朝倉左衛尉教景
 とを申する此教景ハ景行天皇の苗裔ハ
 榮して當國一采谷ハ初て城郭を構へて朝倉義系
 耀せり文明三年五月廿二日朝倉左衛尉教景ハ初
 賜る又蓮如上人南園下向しるは月あり上人園中
 化奪りりか



國氏風ふぶく草の如く法義を傳入し日々多詰せしむる國中を掃蕩して
 敏景の家族も累年の合戦不運を蒙りて軍旅の疲を晴さんとて我もくんと
 なる秋を再びく不出世なりと尊を飯伏しを飯伏の靈場と敏景は由
 とてその影の如きの明沙南園(はら)の地にありて供養本願寺は天は鬼屋
 根の苗裔ゆく花洛(はな)に於て累代を傳へて更勅願するも早く仏園を建
 て當園止りませ(は)是朝倉宗家(宗家)の古蹟あり幸吉清の地はせりり
 又(は)忽かの地を水く穿入し敏景上人を尊敬せりりむり須達長者の
 釈尊を飯依し(は)宗家(宗家)の因茲文明三年七月廿日初て吉清の子(宗家)を
 ぶの金銀米穀人夫材石等そこを敏景宗家(宗家)にゆ(は)不日(は)御建立りりて和田
 本覺寺田(宗家)と與宗(宗家)と桂(宗家)の照護も(宗家)此山(宗家)多屋(宗家)を構(宗家)へ
 造立終り(宗家)上人(宗家)斜(宗家)に(宗家)教(宗家)授(宗家)りりり
 ⑤ 諸宗より偏執のり(宗家)美息女(宗家)見玉(宗家)尼(宗家)御(宗家)往生(宗家)のり
 文明四年正月雪も深かりつとも(宗家)年(宗家)立(宗家)のり(宗家)且(宗家)より(宗家)道(宗家)俗(宗家)男(宗家)女(宗家)櫛(宗家)の(宗家)齒(宗家)を(宗家)引(宗家)が(宗家)如(宗家)



群詣す是によつて諸山より偏執をあげり多(宗家)中(宗家)にも(宗家)平(宗家)家(宗家)も(宗家)豊(宗家)源(宗家)
 ちの中徒(宗家)アける(宗家)頃(宗家)日(宗家)上(宗家)方(宗家)より(宗家)念(宗家)仏(宗家)宗(宗家)の(宗家)僧(宗家)來(宗家)り(宗家)て(宗家)當(宗家)園(宗家)と(宗家)加(宗家)賀(宗家)の(宗家)塚(宗家)吉(宗家)清(宗家)は(宗家)於(宗家)て(宗家)
 宇(宗家)の(宗家)坊(宗家)舎(宗家)を(宗家)建(宗家)立(宗家)し(宗家)念(宗家)仏(宗家)の(宗家)一(宗家)方(宗家)より(宗家)外(宗家)も(宗家)出(宗家)離(宗家)の(宗家)要(宗家)法(宗家)と(宗家)初(宗家)む(宗家)る(宗家)其(宗家)ま(宗家)こ(宗家)
 隠(宗家)ま(宗家)し(宗家)珠(宗家)は(宗家)南(宗家)
 困(宗家)越(宗家)ち(宗家)不(宗家)於(宗家)
 て(宗家)精(宗家)江(宗家)の(宗家)
 澄(宗家)城(宗家)も(宗家)
 横(宗家)越(宗家)の(宗家)淨(宗家)照(宗家)も(宗家)清(宗家)多(宗家)頭(宗家)の(宗家)毫(宗家)抄(宗家)ち(宗家)原(宗家)一(宗家)家(宗家)
 と(宗家)龜(宗家)も(宗家)二(宗家)ヶ(宗家)の(宗家)本(宗家)方(宗家)と(宗家)ある(宗家)由(宗家)これ(宗家)を(宗家)三(宗家)門(宗家)徒(宗家)と
 名(宗家)づ(宗家)る(宗家)當(宗家)園(宗家)に(宗家)此(宗家)三(宗家)門(宗家)徒(宗家)の(宗家)宗(宗家)派(宗家)り(宗家)て(宗家)加(宗家)賀(宗家)不
 子(宗家)高(宗家)田(宗家)の(宗家)宗(宗家)徒(宗家)多(宗家)し(宗家)其(宗家)は(宗家)本(宗家)願(宗家)寺(宗家)の(宗家)門(宗家)徒(宗家)と(宗家)稱(宗家)す
 て(宗家)園(宗家)中(宗家)に(宗家)漫(宗家)る(宗家)多(宗家)奇(宗家)怪(宗家)の(宗家)あり(宗家)之(宗家)早(宗家)く(宗家)寺(宗家)宇(宗家)可(宗家)を(宗家)破(宗家)却(宗家)
 せんと(宗家)内(宗家)に(宗家)企(宗家)つ(宗家)て(宗家)龜(宗家)も(宗家)國(宗家)主(宗家)朝(宗家)倉(宗家)左(宗家)邊(宗家)の(宗家)耐(宗家)教(宗家)宗(宗家)
 殿(宗家)ゆ(宗家)く(宗家)蓮(宗家)の(宗家)を(宗家)宗(宗家)教(宗家)し(宗家)り(宗家)て(宗家)其(宗家)威(宗家)を(宗家)恐(宗家)れて
 左(宗家)ま(宗家)で(宗家)の(宗家)り(宗家)も(宗家)あ(宗家)り(宗家)り(宗家)に(宗家)加(宗家)賀(宗家)の(宗家)國(宗家)主(宗家)富(宗家)樫(宗家)政(宗家)親(宗家)と
 り(宗家)高(宗家)田(宗家)門(宗家)徒(宗家)あ(宗家)り(宗家)も(宗家)これ(宗家)を(宗家)訴(宗家)あ(宗家)き(宗家)ども(宗家)加(宗家)越(宗家)の
 兩(宗家)國(宗家)發(宗家)奮(宗家)あ(宗家)り(宗家)る(宗家)を(宗家)恐(宗家)ま(宗家)て(宗家)月(宗家)日(宗家)を(宗家)送(宗家)り(宗家)り(宗家)

此より吉清は少くも上人宮より引詮諸國より此山へ系流の源住を妬む
 のついで兩國の古後の圃へといひ又平泉を初め諸國の諸山を懐むべしと
 て文明四年正月下旬より諸人吉清へ系流發する停止すべしと一統を傳せ後さ
 まけきば兩國の發流も姑く禪とひと道俗男女は控まもかたよりして
 せける、弥陀如来の本願は末代先智の已まじきを救ひむよ要法と兼るに
 諸人の系流をとりあむるは弥陀の悲願も背きむよ似たりとぞ面と致
 きやけるに蓮師の正息女持壽尼見玉尼といひあり、洛陽淨真院は
 しくりしが御父の教法を皈入し二心よく信心堅固の尼公ありしが都は細川山
 名の軍師より洛中もものさしにりて見玉尼裁すへは下向りて吉清は
 運るりりる不慮は病床に臥みひ遂は八月十四日往生の素懐をとげむ
 御蓮の刻は異方東下此を空よりひまき音樂きこへて菩薩もこ
 へ末座の如くまき人と思ひの思ひをありたりあり又十五日茶末尼乃
 夜吉清多屋衆の夢は白骨の中より三本の青蓮花を生じ蓮花の中

此より吉清は少くも上人宮より引詮諸國より此山へ系流の源住を妬む

より一寸斗ある金色の仏体光を放ちて出現し、此の空に飛去むと見え
 おき十六日の早朝多屋衆とのく寄集て行きも其後を語りて見玉尼公の
 往生に疑ひもあく安養極楽に生じむと有りやとて嘆けける上人世面をす
 一りさきて滅ふ人の性、名もよといへり即ち見玉といひ玉と
 見るに聖道門よりある真如法性の玉を修得の上に見
 るといふあるべし今當流の行者極楽小往生せん可疑ひ
 あき福相を法人に知りしむあやのこ見玉尼一切道
 俗の大善知識こそよく一念皈命の信心を決定し
 仏恩報謝の称名を修むべき物とて勸化
 有りき、聴衆とあり、隨喜の海を流しんまけり
 四方ふかくきありなきに、此上人の化存ありん、在家
 止住の凡夫、極樂往生叶ひがたし、諸宗より妬訶
 るとも今度の一大事の後生を疎すべきやうをしとされし



此より吉清は少くも上人宮より引詮諸國より此山へ系流の源住を妬む

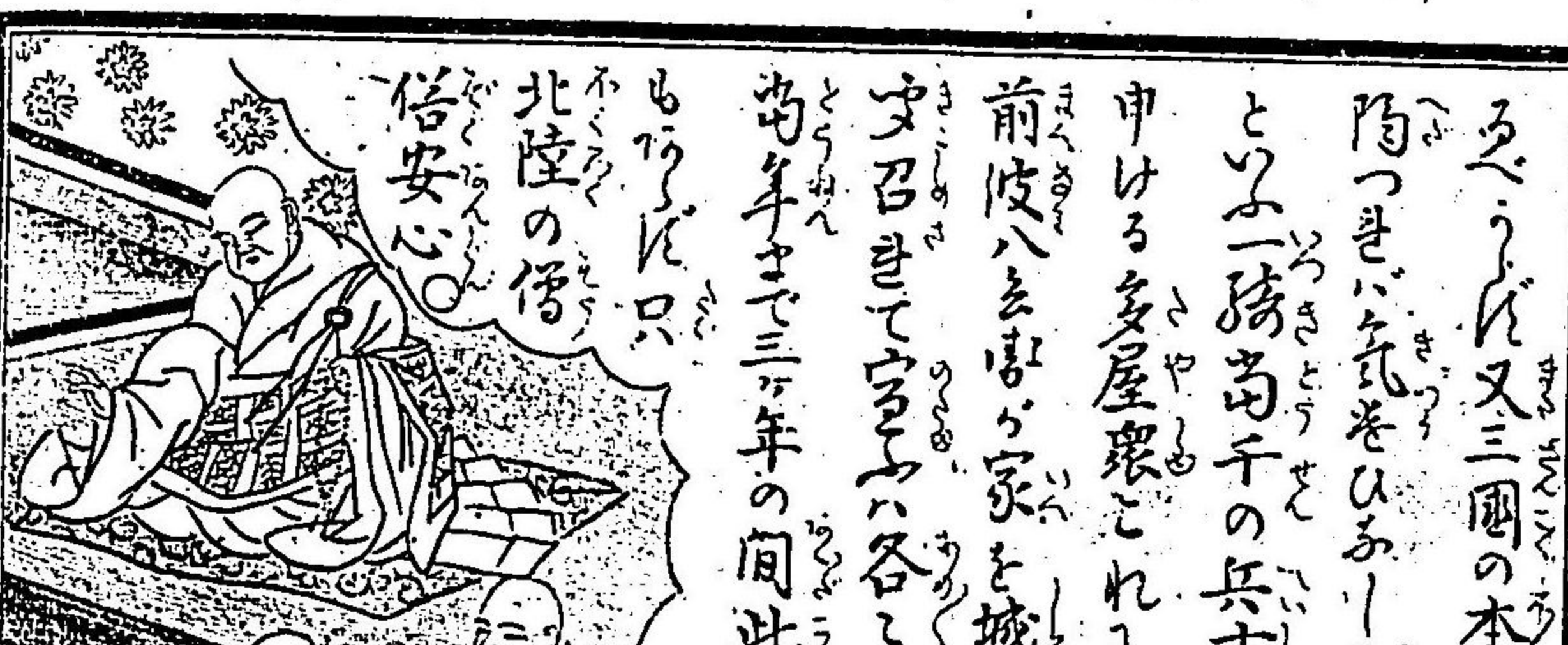
と吉崎入群衆一貴様老若若満くけまは上人もあつた及ぼしてわづ割りも
 中もあつた其比容顔絶く又ける女性男多とあはれ具一人吉崎へ
 冬通と申けるに諸より門下山へ群衆する其代の不可思議なれども罪業
 深き女人の才あまき此女をうけて往生をな度いと山中の人あつたわづされしに
 浄法は只一心に弥陀を皈命して助をむと思ふ心の一念ある時如来の光輝の中は
 一も此上に寝ても覚ても立てても居ても南无阿弥陀仏と唱へて仏恩を報すべし
 と懇々語りしに此女人達其外の人の中されり誠不思議の宿縁なほ
 せて殊俗の法をまじりてつるもの有らば尊とまじりて中へ入りもあつた覺へ付
 るん今いとお暇申して後をうかして退きけり人々怪しむれども見送るは先一人
 吉崎の向ひなる麻鳥の神の社へ入りぬまを其れを思ひわづら神を離れ人々
 又失ひぬ中もけたるき女性白山の藤よりとて其のむとて誠上人の化存神
 にも通じたりとて人々酒作の思ひ跡をり

六 蓮舟多屋衆へ御制戒并厚書朝倉敏景へ贈る



文明五年三月下旬世上頻々發し吉崎山へ諸人群
 せむる諸る諸山の滅亡あまき速に軍勢を催し破却
 すべしとの風同隠きか上人も是を以て疑はし思
 召れいふとんと多屋の面を召し集り衆議批判
 を圖るに本覚寺の蓮惠の今弟和田五郎左衛尉進
 出て申るに今天下隆援の虚に衆と諸浪人の交賊
 堂塔へ乱慕し仏具と棄て宝財を掠りつらひ山野に出
 張り往來を悩し衣服を剥ぎ奪ふ此吉崎へも乱入
 せん心元は此演坂浦の上手より吉崎浦春日山の方へ塘切
 と通し吉崎浦一方口は教置りの方より攻来る便あり
 越前朝倉敏景殿當山を尊崇しもさるおまじより七は山を攻る可なり
 豊原の浪人さ不日は敏景殿誅伐せしむ中もすへなひか所詮加賀一方より
 来る斗りあり然る橋口は堀を搦へし和田五郎を居置るに吉崎へ来る可なり





又三國の本北院を大将とて潮越の方より攻来る目すやるとも漸く
 陶つぎに瓦をひき上りて上淡阪の照須松を勢左忠赤尾弥七郎池田太郎九郎と
 とし一騎当千の兵士及へに潮越の方心易し唯人夫を以て堀切すべしと主人立て
 申ける多屋衆これ同心せしむる日より要害を搦へ出城の義に大聖寺の
 前岐八重山家を城よりまかせと稱儀す因茲此越上人へ宣ひ申上りて道
 中召きて宮中各々各々を所一とて道理に叶はざる其故に去文明のわたり
 尚年まで三年の間此山居住せしむる文上兼花榮権より又名室利養の者
 もつれに只
 北陸の僧
 倍安心
 ○未決定の故に或は邪義を執心し却て正道を信受す
 寧ろ三途に墮す可不便のありこそもこれに故は
 領悔おぼしめ門下の輩邪義を信じて正法を思ひ尚流
 眞実の法名を授て其門下にお化益せし末この門徒
 までも決定眞実の法を授す今度の一大事の往生を
 遂に誠は自信教人信の釈義もおけし且祖師聖



人へ報恩謝徳もあつたんと思ふより門下一人
 ことも信心決定しれりと思ふる昼夜悔ふるを授て
 此地ハ冬もふれハ夏迄の雨し烈し浦智の浪の青波に
 の相引の勢たるハ年々の海を不道に失ひ空風不因きて
 暮る年を累るは老病つり起りて業あつても苦勞つや
 ましころろ者あしききとも只加越の乃倍南流の眞実
 信をとりとるんと思ふ此山は三年の間居住せしむ
 りのこたひは法山傳執の族出たりて此山を破却し衆を
 とるともあまの所感あきば是れ及びざるこ然る不橋は出城を搦へ人数を集
 めんとす益のなす此山を攻めとるべきあり我此山を退出して上洛すべき覚
 悟は内と究め申こと言を盡して信下れをば多衆一々お聴して上上げ
 るは後の頼き心魂は徹し有忍くなすは山よりあがり上人に上りて
 るべしは當山百餘家の者何方は身を隠すべき所あり山野海濱は余をさ

ト一中なき悪賊は身を亡けざるべしハ我子ガ為ても作し又上人一度下
 向ちりて此山は半をいとあみむひ小陸の居俗大なる変化をうけは法流は基作
 を寧ろ他山の悪徒より守りて其致し存せざるに後日青より上げきハ上
 人若て各の中より至極ふまでも獨生獨死獨去獨来と徑にも説せる事
 弥寶及王位は命時不隨者とも演ふれて山野は身を棄るも驚くべき事
 罕人共財宝を棄此山破却及ふとつども朝会教景とハ諸華三會の曉までの契
 約こそ本願のお傍の山あり又も再び海を遠く去るべき事易くハ一必す
 を構て防戦を企つる毎益ありと堅く制戒し多き屋敷を謝しては
 系知はり已來急度お懐中一ありあがり一捺除起の多圍主へおあせし
 教の存をもつるべき事と強し中けき運は是れ飛れを語の語勝る
 本覚をも使僧として朝会教景へ作せざる其文に曰く
 然と一札を以て破せしめ及三ヶ年の乃者山居をトヤ根元ハ名圓
 利養の為あり又ハ采花榮耀をとりて唯往生極樂の為計せざる

當圓加お越中の士民百姓皆後惡業を作し一善も修せし一功も勤
 めり空しく三途は墮落すべきの乃不便の乃極しは念仏往生の安心を勤
 來の本願末代の根柢お愈の法つるよつと備へ念仏往生の安心を勤
 るの外他事なきや近比罪人出化の義諸方より種々の雜説言倍日乃逐
 惡のいれおたる果は所願所希に於て善を修せざる何を以てを罪か
 処其き非不運の事悪業お成りしもの故は是心轉し
 念仏修りせしめんと致す女要害なき時ハ一切塵
 懸其便を得山海の軍賊障身を去る故近日要害
 を構んと致す如あり其條ハ所用なき所あり然り
 とつども無理難及の子細を出來せしむる時ハ今
 度順次の往生を遂仏法の為し一命を捨て合戦
 せべき事一慈日多屋衆衆會同決定せしめ
 法苑珠林内云承て思禮謹言



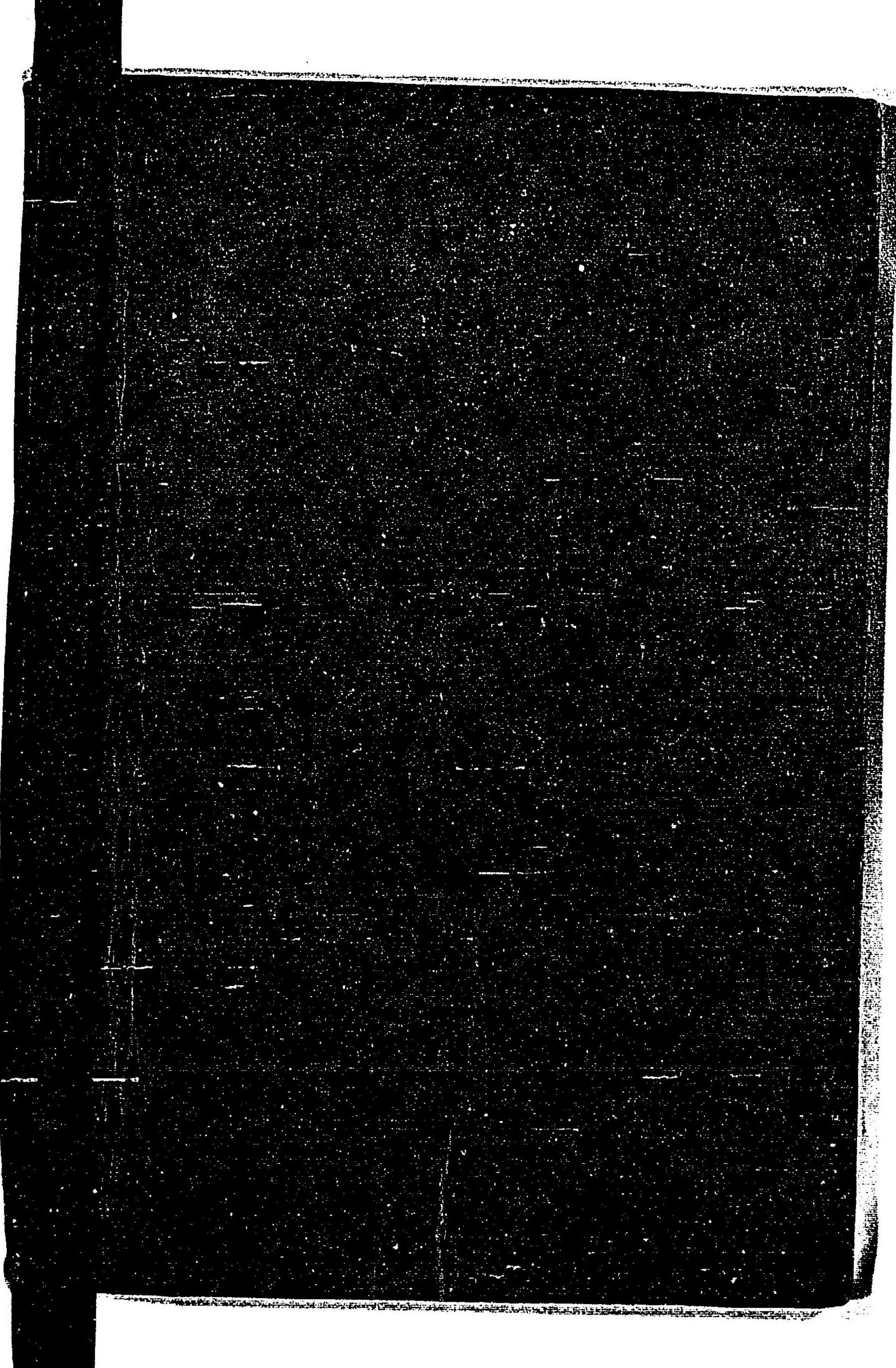
文明五年三月日

多屋衆

朝倉彈正左馬尉殿

兩僧此書翰を拵まされしに朝倉敵系對面ちつと違へば被せり申すに
 返れを以て申すに及ばぬども以て僧系より僧上ハ其義及ばざるに立入りて上人
 其外一山の多屋前へ申すに及ばぬ今な要害の事ハ断り申すに及ばぬ其義及ばざるに立入りて上人
 の為ニ要害を搦へるに及ばぬ及ばざるに及ばぬ其義及ばざるに立入りて上人
 の働いし一寺破却不及び及ばぬ其義及ばざるに立入りて上人
 れ及るハ其義及ばざるに及ばぬ其義及ばざるに立入りて上人
 申すに及ばぬ其義及ばざるに立入りて上人
 害をかまへ及る全ク合戦の用意よ及ばぬ其義及ばざるに立入りて上人
 ち又ハ人夫の用意よ及ばぬ其義及ばざるに立入りて上人

蓮如上八御一代記圖繪卷上終



特36
905

019280-001-9

特36-905

蓮如上人御一代記図繪

清水 常太郎 / 著

上

M25.9

ABF-2917

